

歴史の闇に埋もれた物 語

書いてみたかった

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

曹操陣営に仕えるただの斥候であった張三。

やがて情報を司る部隊を任され、それは曹操が歩む霸道へと大きな影響を及ぼしていくこととなる……。

※『真・恋姫†無双　く乙女繚乱☆三国志演義く』の世界観がベースです。基本的に英雄譚と革命の要素はありませんが、微妙に混ざるかもしれません。

目次

とある老人の悔恨譚	—	1
とある村のありふれた日常	—	9
とある青年の悔恨譚	—	26
とある国のありふれた日常	—	36
張三、張子季、願叶といふ凡夫	—	53
曹操、曹孟徳、華琳といふ英雄	—	65

とある老人の悔恨譚

後漢の時代。

既に人物批評家として大陸に名を馳せていた許子將をして『子は治世の能臣、乱世の奸雄』と評された曹孟徳が治める陳留の城にて、一人の男が忙しなく指示を出していた。

「——以上です」

「ご苦労。引き続き、冀州に潜み袁家の情報を集めてください」

「御意」

男の名は、姓は張^{ちやう}、名は三^{さん}、字を子季^{しき}。そして、真名を願叶^{がんか}という。

「張隊長。荊州方面からの報告ですが——」

「夏侯元讓様より、賊討伐のため急ぎ小隊を派遣するようにとの下知が——」

「浚儀にて内偵していた者から、汚職の裏が取れたとの——」

「本郷警備隊長より、ご自身の風評について極秘裏に依頼が——」

「……待て。待ってください。後生だから、一人ずつ頼む」

絶え間なくやってくる報告。どんどんと積み上がる竹簡の山。それらを前に、疲れた

ように項垂れる張三。

自ら望んで今の地位に就いたとはいえ、あまりの多忙さに若干遠い目をしてしまう。何ならちよつぱり後悔もしている。けれど、生来の生真面目さ故か、律儀に一人ずつ丁寧に話を聞き、新たな仕事を抱え込み、溜息を堪えて指示を出す。

そうして一通りの厄介事を片付け、ようやく一息つけた彼はゆつくりと瞳を閉じて、まるで自分に言い聞かせるようにぼつりと呟いた。

「……すべては太平の世を築く礎となるため。これしきの事なにするもので」

静かに開かれた漆黒の双眸に、鈍く輝く熾火の色がちろりと蠢いた。

* * *

そも張三という男は、冀州は鉅鹿郡のとある寒村。そこに住む貧しい農家の倅でしかなかった。

朝起きれば親兄弟と共に畑を耕し、村の力仕事を手伝い、質素——といえば聞こえはいいが、ろくに具も味も無いような粗末な雑炊を食べて寝る。そんな毎日。けれどそれは、この時代の人々からすれば別に珍しくもなんともない、ごくありふれた日常であり、

だからこそ張三もそれが当たり前の事として日々を慎ましく生きていた。

唯一、彼が他の同時代の貧民たちと違ったことと言えば、それは読み書きができたことだろう。

村に住んでいた変わり者の老人。かつては洛陽で役人をやっていたとも、有名な名士の出であるとも噂されるが真偽のほどは定かではない。

荒んだこの時代の人間としては珍しく、貧しいながらも助け合い、仁を忘れていなかった村人たち。彼らはある日ふらりと村に流れてきたこの老人を温かく迎え入れ、よく世話をしてやった。そして、そんな村人たちに感銘を受けた老人はせめてもの感謝のしるしとして、村の子どもたちに簡単な読み書きや算術などを教えることを提案する。

当初は固辞した村人たちであったが、知っておいて損をすることもなし、学の有る者が増えれば後々不正を働く官吏への備えにもなると諭され、野良仕事の合間に未だ幼い子どもたちを老人の下へ学びに行かせるようになった。

そして張三もまた、他の子どもたちと同様に老人の下を訪れて学ぶようになる。遊びたい盛りのやんちゃ盛りの子ども達がワイワイと騒ぐ中で、この頃から実直であった張三は黙々と勉学に励み、そんな彼の姿を老人はどこか偲ぶような眼差しで見守っていた。

張三は勤勉ではあったが、特別才能があるというわけではなかった。良くて秀才止ま

り。これまで老人が出会ってきた一を聞いて十を知るような数多の俊英たちには遠く及ばない。けれど、幼いながらに大人たちの仕事を必死で手伝いながら、赤切れた手で筆を持ち、寒さに震えながらそれでも何度も何度も繰り返し書を捲る。そんな健気で直向きな少年の在り方が、老人にはひどく眩しく映り、とても輝かしいものに思えて仕方がなかった。

そうして数年の時が過ぎ、ある日、張三は老人に尋ねた。

「……どうして先生は、この村にやってきたのですか？」

別に何か意図があつたわけでも、訝しんだわけでもない。それは、子ども特有の純然たる疑問。ふと気になつたから、聞いてみただけ。どうして空は青いのか、どうして鳥は空を飛べるのか、どうしてどうしてと幼子が親にその気持ちをぶつけるように、幼い彼もまた幼いながらに感じた疑問を老人へとぶつけたのである。

「ふむ……。そうじゃなあ……」

暫し黙した老人はしかし、やがてぼつりぼつりと語りだす。

かつて太学という場所で教鞭を執つていたということ。

腐敗が蔓延り、崩壊へと向かう漢帝国。そんな国を憂い、立て直すべく、志を同じくする者たちと共に国を支え得る人材を育てることに心血を注いだこと。

しかし、そんな老人の想いとは裏腹に、彼らの教え子たちは暴走し、自ら破滅への道

を歩み始めてしまったこと。

「……結局、儂は何もできんかった」

老人が手塩にかけて育てた教え子たちは自らを“清流派”と称し、利権に溺れる宦官らを“濁流派”と呼び公然と批判した。この時代、皇帝の外戚勢力を抑え、中常侍を中心とした宦官たちが大勢を占めていたとはいえ、宮中での権力闘争は未だ続いており、それが“清流派”の乱入でさらに激化。より混沌とした状況に陥つたのである。

もはや老人の制止する声も届かず、やがて“清流派”の運動は宦官たちの重い腰を上げさせ、彼らを本気にさせてしまう。

——党錮の禁。

後にそう呼ばれ、二度にわたって行われた宦官たちによる弾圧で、老人の教え子たちはそのほとんどが政の中心たる洛陽から駆逐されてしまった。

国のためにと寝食も忘れて彼らを育て上げ、さあこれからだと思つた矢先に一掃されて……。どうしてこうなってしまったのか。どこで間違つてしまったのだろう。自分はただ滅びゆく『漢』という国を救いたかつただけなのに、いつの間にか大事に育てた可愛い教え子たちは士大夫どもに利用され、権力争いの道具に成り果て潰されてしまった。

「何もかもが虚しくなり、まるで心にぽっかりと穴が空いたようじゃった」

そうして虚無に覆われた老人は失意のままに洛陽を後にした。

あてどなく大陸を彷徨い、やがて路銀も底尽き、生きる気力もなく、自分はこのまま何処ぞとも知れぬ地で野垂れ死ぬのだろうと悟る。それでいい。多くの才ある若人の将来を潰してしまった自分の末路など、それこそが相応しいのだと、そうして朦朧とした意識のまま立ち寄った村で行き倒れ、介抱され、その村こそが張三が住まう村だった。「もう二度と人に何かを教えることなどあるまいと思うておつたのじゃがなあ……」

貧しいながらに日々を力強く生きる村人たち。

荒んだ世の中にありながら笑みを絶やさず生きる老若男女。

天に見捨てられ、帝という存在すら形骸化し、もはや絶望しかないこの世界。

それでも尚、ここに生きる彼ら彼女らは五常の教えを忘れず、こんな無能で役立たずな老いぼれに少ない食料を分け与えてくれる。それは、この『漢』という国の全てを見限り、失望し、悲観し、自棄になっていた老人にとつてはまさに驚天動地な出来事であった。

「じゃからこそ、儂は少しでもこの村で授かった恩に報いるため、再び教鞭を執ることにしたんじやよ」

この厳しい世の中で、この理想郷のような場所が、この村の心優しい人々が、一日でも長く幸福のまま生きていけるように、と。そう願いを込めて……。

「……張三、いや願叶よ」

「はっ」

自分を見上げる少年の頭を優しく撫でながら、老人はそつと地面に片膝を突き、彼の目線に合わせて語りかける。

「学べ、そして生きよ」

「……はっ」

師である老人の真剣な眼差しに、弟子である少年もまた真剣な表情で応える。

「この先、辛く苦しい時代がやって来る。ときには絶望し、死を選びそうになる事もあるかもしれない」

「……」

「じゃが忘れるな。どんな未来にも必ず希望はある。天は決して我らを見捨てぬ。儂がこの村に辿り着けたようにな……」

正直なところ、未だ幼い張三にとって老人が語ってくれた昔話は難しい部分が多すぎて、そのほとんどを理解できていない。

しかし、それでも幼いながらに感じ入るものがあつたのだろう。この老いさらばえた老人の回想は少年の記憶に深く刻み込まれた。

「……天よ。見ておるか？ 見ておるのだろうか？」

古い衰えて尚、眼光鋭い老人の視線が虚空に向いた。

「この子が、この願叶こそが、我が生涯最後の弟子じゃ」

噎れて震える声に想いを込めて、老人は天へと言葉を投げかける。

「どうか、どうかこの子を……導きたまえ」

願わくば、この子の未来に幸多からんことを――。

「……願叶」

「はい」

「願叶、我が最後の弟子よ」

「はいっ」

老人は切に祈り、願い、優しげに少年を抱きしめる。

幼い張三の肩に、溢れた想いが滴となって零れ落ちた。

「何があっても、お主は――」

この数日後、老人は静かに息を引き取った。

苦悩に満ち、苦難に喘ぎ、何もかも諦めかけて、最後の最後で希望を見出した老人の死に顔は、とても穏やかなものだったという。

とある村のありふれた日常

冀州は鉅鹿郡のとある寒村。

十数年前に師を失った幼い少年は、優しい村人たちに見守られ、健やかに育つていった。既に成人して字も得ており、青年となつた張三は村の若者たちの纏め役となつて日々を忙しなく生きていく。

暮らしは相変わらず貧しい。

いや、年々増えていく税を考えれば幼少期より生活は苦しくなっているだろう。けれど、未だこの村の人々は前を向いて生きていた。それはあの老人の薰陶によるものか、それとも生来のものなのか。いずれにせよ、辛く厳しい世にあつて彼らは懸命に生き続けていた。

そして、張三は今日も一日よく働き、学ぶべく、元気に玄関の戸を開けて――

「うむ。今日も良い天気だ――なぶつふあ!？」

「どうだみたかー! 張子季先生に一撃入れてやったぜー!」

「うわー……。お兄ちゃん本当にやっちゃったー!」

「お、オレ知ーらない!」

「わたしもー!」

「うええっ!? おまえら裏切るのかよー!」

出合い頭に近所の悪ガキに草束を投げつけられ、見事顔面に喰らって盛大に咽ていた。どうやら葉っぱに付いていた小さな虫が口に入っただけらしい。ご愁傷様である。

「ゴホッげほ、おえっ……! お、おのれ……小童ども覚悟はできているのだからうなっ
!」

「やべっ!? みんなにげろー!!」

「わーい! 先生がおこったー!」

「にげろー!」

「にげるのー」

張三が怒鳴ると同時、蜘蛛の子を散らす勢いで逃げていく子供達。そんな彼らの後ろ姿を眺めながら、青年はやれやれといった風に溜息をこぼす。

「あー……、悪いな張三。家の馬鹿息子は後で俺の方から叱っておくから」

「頼みますよー。これじゃ師としての威厳が……」

「なーに言ってるのよ。はじめっから願叶にそんな威厳はないでしょう?」

「は、母上えええ」

悪童の父親らしき人物に抗議する張三であったが、即座に実母から容赦のないツッコ

ミを入れられる。

そう、張三の師であつた老人が先立ち、今では彼がその後を継いで子ども達に読み書きなどを教えていた。ただ、さすがにまだ若すぎるといふこともあり、当の子ども等からは盛大に舐められているのだが。

「一応、アイツも家の仕事や下の連中の世話なんかはしつかりやるんだがな。如何せん、あの悪戯好きは誰に似たんだか……」

「いや、どう考えても父親譲りでは？」

「間違いなく李家の血筋ね。父親の小さい頃そつくりよ」

「ははっ！ 張三も母君も可笑しなことを言う。……俺ならもつと上手くやれる！」

「そういうところですよ」

「そつくりじゃない」

張三とその母からの呆れたような眼差しに頓着することもなく、ガハハハと盛大に笑つてみせる李某。どうにもこの李家の血筋というのは凶太い性格の者が多いらしい。

そうして彼ら三人が賑やかに歓談していると、不機嫌な様を隠すこともせず、杖を突いた老人が惘然とした表情で近づいてきた。

「……まったく、朝つぱらから情けない声やらむさ苦しい笑い声が聞こえてくると思えば、やはり張三たちか！」

「そりやないよ、爺さん。私だつて朝から草塗れになんぞなりたくはなかつたさ」

「ふんっ！ そんなものお前さんの不徳のせいじやろて。そうじや、そうに違いない」

ふてぶてしい態度でズケズケと物言うこの老人。通称、爺さん。あるいはジジイ。稀にクソ爺なんて呼ばれたりもする。年寄りが長生きできないこの時代では珍しく長寿であり、そのため村の住民たちからは親しみを込めて皆のお爺ちゃんとして扱われているのだ。

一応、この村の長老的なポジションの人物でもあるのだが、ご覧の通りの気難しい気性故に張三は少々苦手だつたりする。

「なんだよ、朝からずいぶんとご機嫌斜めだなジジイ。まーたババアと喧嘩しやがったか？」

「かつ！ 儂がちよいと酒量を増やしたくらいで喧しく言いよつてからに。うるさくて敵わんわい。なーにが年を考えるじや。自分の方が儂よりよっぽど年上のクセしてのう」

そう言つて妻である婆様を罵りつつ悪態をつく爺さん。いつものことである。

だがしかし、張三をはじめその場にいる誰もが賢明にも口を噤み、顔を青褪めさせながら沈黙を守つた。なぜか？ イキがつて好き放題言つている爺さんのすぐ後ろに山姥……いや、違う。夜叉……でもない。噂の主こと婆さんが静かに佇んでいたからである。

「まったくあの死に損ないめ、さっさと往生すれば良いものを……」

「へえ……。遺言はそれで構いませんね、お爺さん?」

「……婆さんや。いつからそこに?」

「『やはり張三たちか!』のあたりからでしょうか」

「……………要するに最初からということか」

今日も仲良く痴話喧嘩に勤しむ老夫婦を放置して、張三と母は朝食のために家へと戻った。どうせ犬も食わないから仕方ないね。

「あ、三の叔父上きたー!」

「しやんのおじーきたー!」

「モルスア!」

母の後を追って家に入った張三。

すると、左右から猛烈な勢いで飛び込んできた甥姪コンビのツープラトンロケット頭突きを両脇腹に喰らい撃沈してしまう。南無。

「あらあら、我が孫は今日も朝から元気ねー」

「な、にを……呑気に……孫馬鹿を拗らせているのですか、母上」

床に蹲って悶絶し、ファー……ブルスコ……ファア的な感じで虫の息な張三。そんな息子の姿を尻目に、ニコニコと愛おしそうに孫の頭を撫でている母は強し。

「三の叔父上、ごはんー！」

「しゃんのおじー、あそぶー！」

甥の張豊ちやうほう。今日も元気だご飯うまい！ 五歳児！

姪の張良ちやうりょう。三度の飯より遊びたい！ 三歳児！

二人とも長兄の子ではあるが、日頃から律儀で純朴、何かと世話焼きな張三にすつかり懐き、今では父親である長兄が嫉妬して拗ねる有様である。張家は今日も平和です。「二人とも、いつも言っているだろう？ 私を慕ってくれるのは嬉しいが、仕留めにくるのは止めなさい」

「？」

「？」

「なぜ二人して首を傾げるんだ。無自覚か。こちらとしては割と死活問題なのだがなあ」

張三は疲れたように肩を落とすと、やれやれといった様子で二人の甥姪を抱き上げて連れ歩く。

「まあ良い。次からは気を付けておくれ」

「……………？ はい！」

「……………？ あい！」

「いつも返事だけは良いんだよなあ……」

「何だかんだ言つて、結局は願叶も甥姪馬鹿よね」

母親からジト目でツツコミを入れられ、思わずついつと視線を逸らす張三。実に耳が痛い。

そんなどこか賑やかで和やかな家族の会話を交わして食卓へと辿り着いた張三は、義姉に二人の幼子を預けるといつもの定位置に腰を下ろす。既に父と長兄夫婦、次兄は揃っているようだ。

「お待ちせしました、父上」

「うむ」

「……やはり納得できません。何故、二人とも父たる俺ではなく願叶に懐く。俺も二人から出迎えられるたい」

「まあまあ、兄者。ほら、あれですよ。願叶は母上に似て柔らかな顔立ちですからね。兄者は父上と同じで顔が怖いから近寄りがたいのですよ、きつと。なあ、願叶？」

「そこで私に同意を求めるのは止めていただきたい」

寡黙にして巖、だが実体は単なる口下手なだけである父。

可愛い我が子を末弟に独占され、額に青筋を浮かべている長兄。

そんな長兄を面白そうに茶化し、煽りに煽つて弟へと擦り付けようとする次兄。

そして、そんな男衆をクスクスと微笑ましそうにのんびり眺めているのが義姉だ。ここに孫二人を猫かわいがりしている母と、くーぎゅーグルルと腹を鳴らして食事が始まるのを今か今かと待っている甥姪を加えた七名が、張三の何ものにも代え難い大事な大事な家族である。

暮らしは貧しい。育てた作物を売って得られた僅かな銭は、税として役人に持つていかれてしまう。農家であるのに毎食の食材にも事欠く始末だ。未だ幼い二人の子どもたちにお腹いっぱい飯を食べさせてやることすらできやしない。

しかし、それでも張三は幸せだった。この村での生活に、確かに幸福を見出していたのだ。決して現状に満足している訳ではないけれど、だからと言ってまったく満たされていない訳でもない。

これからだ、そう張三は考える。あの老人がこの村に種を植え、それが芽吹くのは、これからなんだ。そう強く意識する。

長年、この村を支えてくれた長老衆。今この村を導いている父たちの世代。そして、老人の教えを受け、知識を身に付けた自分たち若輩。それらが手を合わせて村を発展させていければ、きつと明るい未来が待っていると、希望はあると、そう信じて張三は前を向いて今日まで生きてきた。

* * *

朝食後、畑仕事から戻った張三を呼び止める声。

「おーい、張三。ちよつといいかー?」

「あ、はい。大丈夫ですよ」

「今度の収穫と、今後の作付けについてなんだが——」

老人亡き後も、張三は学び続けた。

ときには老人が残してくれた書を読み耽り、またあるときは彼と同じく老人から学んだ先輩たちを頼つて教えを乞うた。また、張三は自分が学んだことを惜しげもなく下の者たちに教え、彼らにも学ぶことを奨励していく。

そんな張三だったからこそ、上の者たちは彼を信用し、また下の者たちは彼を信頼した。

「年々、麦の収穫が減っています。昨年も不作でしたし」

「西の方では飢饉に見舞われたらしいぞ」

「それに、青州ではまた増税らしい」

「やはり今年も厳しくなるか……」

張三が中心となって若者たちはよく言葉を交わした。

田畑のこと、村の運営のこと、賊への備え、賄賂をせびる役人への対策。村で何か問題が起きるたび、彼らは頭を寄せ合つて議論を尽くし、知恵を絞り、時には街まで出て識者に頭を下げて教えを乞うなんてことすらあつた。

それはきつと、かつて老人が夢想した『漢』という国の未来。中身のない論戦ではなく、批判目的の揚げ足取りでもない、相手と手と手を取り合つて同じ目的を目指しながらあらゆる可能性を論議する。老人が願ひ、国中から才ある者たちを集めても終ぞ叶わなかつた光景が、そこにはあつた。

「雑穀の作付けを増やしてはどうでしょう？ あとは……黄豆でしようか？」

「うーむ……。しかしなあ、米や麦以外だと買ひ叩かれるのがオチじゃないか？ 税が払えん」

「そうなんだよな。せめて物納を認めてもらえれば……」

「それだと収穫した食いもん全部持つてかれそうだけだな」

「ですよねー」

世に名だたる俊英たちが聞けば失笑するような内容だろう。こんなものは議論に値しないと、そう言い捨てられるかもしれない。

「やはり灌漑で水を安定させるのが一番ではないか」

「しかし、そこまでするには我らだけでは厳しいであろう？ それより耕作の効率を上

げるために牛や馬を買えば——」

「だが費用が——」

「——北の方の麦は病気に強いらしい。どうかして種粃を手に入れられないか？」

「それなら行商に頼めば——」

「そういえば前に行商から聞いたのだが、最近ここいらの街を巡っている旅芸人の姉妹が人氣らしくてな——」

「——知つとるか？ 以前、頓丘の県令だった曹孟徳様がまた朝廷に出仕するらしい」

「曹孟徳様というと、洛陽北部尉時代に禁令を破った宦官の縁戚を叩き殺したという、あの？」

しかし、彼らはひどく真剣だった。それでいて、笑っていた。誰もが明るい未来を夢見て、笑って暮らせる世を願って、そのために自分たちができることを精一杯やっていた。

「おい、大変だつ！ みんなこつちに来てくれー!!」

そう、その日までは——。

* * *

「……難民、ですか」

村の入り口に現れた一〇人前後の集団。

それは薄汚れ、襤褸を纏い、痩せ衰えた男たちであった。

「どうも北の方から流れてきたらしい」

「北と言うと、中山国からでしょうか？」

「さあ、そこまでは……。おい、どうなんだ？」

「……ああ、そうだよ。それより、頼む。水だけでもいい。恵んでもらえないか？」

どこかぼんやりとした様子で懇願する陰気な男。

張三は訝しげに眉を顰めるものの、お人好しに過ぎる村人たちは彼らを甲斐甲斐しく世話していく。そして、張三自身もこの村特有の人の良さからだろうか、疑いはしたもののやせ細った男たちを一瞥すると、仮に彼らが悪人だったとしても食糧庫から食べ物を幾つかくすねる程度だろうと判断してしまふ。

もちろん、村に食料の余裕があるわけではない。役人に収める税のことを考えればギリギリだ。それでも、ここに来るまで彼らが味わったであろう飢えを思えば、少しくらいならば許容しても良いだろうかと考えてしまったのだ。

「……きつと、私は甘いのだろうか」

「何か言ったか、張三？」

「いえ、何でもありません。私は彼らが休める場所を用意してきます」

「おう、よろしく頼む」

一つ補足するならば、彼らだつて賊の警戒ぐらいはする。

ただそれは、あくまで村の外から徒党を組んで襲つてくるような賊を想定したものだ。もし今ここに、あの老人が存命であれば、また或いはこの村の人々が悪意というものにもう少し敏感であれば、この先の展開は違うものとなつていたに違いない。

「ありがてえ……。ありがてえ……」

「恩に着る。助かった」

「オラあ、このご恩は一生忘れねえよお」

「……」

村人から施された薄い麦粥を貪りながら、男たちは涙を流して村人たちへ感謝の言葉を繰り返す。

そんな彼らを尻目に、張三は空き家となつていたあばら家に藁を敷き、彼らが泊まれるように準備するのであった。

* * *

丑三つ時。

「――！」

「!? ――― ツ!!」

「――！」

張三は、外の喧騒で目を覚ます。

「……なんだ？」

寝ぼけ眼を擦りながら、のそのそと寢床を這い出ると、張三は闇に包まれた室内をキョロキョロと見渡す。

どうやら家族はまだ誰も目覚めてないらしく、起きているのは彼だけだった。

「一応、村の蔵には見張りを立てたはずだが……」

大方、予想通り難民の誰かが食料を求めて忍び込もうとしたんだろう。そんな風に考えて、着の身着のまま無防備にも家の戸を開けて、彼は一步外へと踏み出した。

「殺せ殺せエー！」

「ひいつ!? た、助けでえあーあ、あ、あ、あ、あ、」

「い、いや！ イヤアアアア」

「ふはははは！ ほら逃げろ逃げろ！ 斬り殺されてーのかっ?！」

「ヤメロ！ やめてくれ！ 金も食べ物も全部あげ——ぐげぎや」

「おい、テメエら奪うもん奪ったら全て燃やせえーっ!」

「死ねやジジイ!」

「お爺さんっ」

「逃げろ、婆さん！ さっさと逃げんかあつ！ 頼む、逃げとくれえ……ッ!」

「うわああああああん」

「父ちゃん！ とーちゃん!!」

「がはっ……!! クソ……ば、カ息子、泣い……てる暇が、あつたらとつと逃げやが……レ。

「おマ、えが妹ヲ……守らねえで……どうすんだっ!!」

「お願いしますお願いしますお願いしますお願いしますこの子だけはこの

子だけはこの子だけはこの子だけはこの子だけはこの子だけは

「やめろ！ 殺すなら俺が殺される。だから、だからこの子だけは殺さないでくれ!!」

「……そうか。死ね」

それは、有り体に言えば地獄であった。

村中を見たこともない男たちが暴れ回り、建物を壊し、家人を引き摺り出しては数人

で斃り殺し、僅かな蓄えであつた食糧を貪り、銭を奪い、女を犯し、生きた子どもごと家を燃やす。

村を襲っている連中は、難民の男たちなどではなかつた。武装し、生き生きと駆け回つては村の住人たちを虐殺し、中には馬に乗つて火をつけて回っている者さえいる。

「なん……で……？ どう、して……なんだこれは……？」

仲が良かった同朋が苦悶の顔で死んでいる。あれこれと世話を焼いてくれた兄貴分の首が路傍のゴミのように打ち捨てられている。昨日まで読み書きを教えて面倒を見ていた童が泣き叫びながら絶命した。

「や……やめっ！ やめてくれ！ ヤメロオオオオーツ!!!」

彼は狂つたように咆哮しながら走り出そうとして、唐突に後ろからガツンと頭を殴られて膝から頷れる。

「あ……ああ？ なに……がッ」

俯せで地面に倒れ伏したところに、追撃の一撃が襲い来る。

散々に頭を殴打され、手足を踏みつけられ、トドメとばかりに腹を蹴りあげられた。

「へへ……。こんだけやりや、さすがに死ぬだら」

頭を殴られたからか、意識がハッキリしない。体がうまく動かせない。

ただ、蹴り上げられて仰向けになつたことで、視界だけは開けた。額から伝つてきた

血で視界が赤く滲む。

「おい、悪く思うなよ。兄ちゃん」

頭上から嘲笑うように投げかけられた言葉。

それは、聞いたことのある声音だった。見たことのある顔だった。知っている難民の男だった。

なんの事はない。要は難民の男たちは賊とグルだったのだ。

村の様子を確認し、賊を撃退するだけの力はないと判断したら、夜に村を抜け出して賊の本隊を呼び寄せる。ただそれだけ。子どもでも考えつくような策とも言えない手口。そんな罠に、青年の村はまんまと引っかかったのだ。

「これも天のお導き。黄天が世のためってな」

薄れゆく意識の中で、最後に青年が見たもの。

下卑た顔つきで嗤い、こちらに棍棒のようなもの振り下ろす陰気な男の顔。

そして、その頭に巻かれた黄色い頭巾。

後世、『黄巾の乱』として語り継がれ、大陸全土を揺るがす動乱の始まりだった。

とある青年の悔恨譚

どれだけの時間が経過したのだろう。

既に日は登り、日輪が大地を照らす眩しきで張三の目が覚める。

「……生、き……でる？」

青年が目覚めて最初に感じた疑問がそれだった。

彼が思いのほか頑丈だったのか。難民の男が死んだと早とちりしたのか。もしくは

—— 情けをかけられたか。

「つ……！　　そうだ、村はっ!？」

いずれにせよ、それは何の慰めにもならないだろう。

痛む全身に鞭打ち、どうにか身体を起した張三の視界に映ったもの。

—— 焼け落ちた家屋。

—— 荒れ果てた田畑。

—— いたるところに打ち捨てられた、村人の遺骸。

女も子供も、老いも若きも関係ない。みんな、死んでいる。

首を切り落とされた者。慰み者にされた末に斬殺された者。毆殺され、撲殺され、刺殺され、絞殺され、焼殺され、轢殺され、ありとあらゆる殺され方で、皆殺しにされていた。

「あ——」

そして、張三はようやく気付く。

己の背後。未だ燻る黒い煙を天へと昇らせながら、燃え尽き残骸と成り果てた我が家。

「ああ——」

彼は、震える腕を伸ばした。炭と化した壁材を掴み、無我夢中で瓦礫を押しつける。

自身の指先が切り裂けようと、爪が割れて剥がれ落ちようと、燃え残りの火で全身を炙られようと、何ら気にする素振りすら見せずに、彼はただただ直向きに手を動かし続ける。

「ああああ、あ、あ——」

お互いを庇うように、抱き合いながら横たわる黒いモノは、果たして両親だろうか？

ならば、この大柄で子どもたちを守るように覆い被さっているのが長兄で、その長兄を庇うように傍にるのが次兄かもしれない。だとしたら、兄たちの下で小さな塊を抱

廢墟と化した村を彷徨い、墓標となりそうな石や材木を拾い集める。次いで、村の農具が保管してあつた倉庫に赴き、運よく燃え残つていた鍬を引き摺つて我が家だつた場所へと戻る。

「……」

鍬を振り上げて、下ろす。それを繰り返して、やがて大人が横になれる程度の穴が出来上がる。

「父上」

そこに父の亡骸を埋葬しようとして、ふと手が止まる。

「……父上は、母上と一緒によろしいですか？」

そう物言わぬ屍に語りかけて、返事を待つ。やがて二言三言と何事かを囁いて、僅かに頷くと張三は静かに鍬を手にとつた。

「少々お待ちください。すぐに準備します故」

鍬を振り上げて、下ろす。振り上げては、下ろす。それを繰り返して、やがて大人二人が横になれる程度の穴が出来上がる。

「父上、母上。お待たせしました」

そこに父と母の亡骸を埋葬しようとして、ふと手が止まる。

「……兄上たちも一緒の方がよろしいですよね？」

鍬を振り上げて、下ろす。振り上げては、下ろす。振り上げ、下ろして、また振り上げて。それを繰り返して、やがて家族全員が横になれる程度の穴が出来上がる。

「狭くはないですか？ もう熱くはないですか？ 寒く、ないですか？」

父の左隣に母を、その隣に次兄を、父の右隣に長兄を、少し間隔を空けて義姉を、そして、その間に甥と姪をそつと優しく横たえる。

「……それでは、お別れです」

寸刻、家族に黙祷を捧げた張三。

彼は再び鍬を手に取ると、まるで十二かを振り切るように勢いよく土を被せようとして——結局は膝から崩れ落ちた。

「父上、母上え」

たった一人残された男は、生き残ってしまった張三は、地面に額を何度も打ち付け、大地に拳を叩きつける。

「どうして、どうして……私が、私なんか……ッ！」

割り切れる訳が無かった。納得できる訳が無かった。

「死んでしまったっ！ 私の所為で、私が愚かだったから、家族が、村のみんなが——死んでしまったではないかっ!!」

怪しんだのなら、追い帰せば良かったのだ。疑っていたのだから、もつと警備を厳重

にしておけば良かったではないか。いや、そもその話、難民など受け入れようなどとしなければ——、そこまで考えて張三は再び大地に額を打ち付ける。

「——先生。私は、私たちは、間違っていたのでしょうか」

呻くようにこぼれ出たその問いに、応えてくれる人はもういない。

「……天よ。見ているか？ 見ているのだろうか？」

暗く澱んだ瞳で大空を見上げた男は、問い掛ける。

「何故に、私の愛する家族を篡う！ 何故に、私の大切な同胞を奪う！」

血と泥と炭で汚れた顔を悪鬼羅刹の如き表情で塗り潰し、彼は吼え猛る

「篡うのなら、愚かな私を殺せ！ 奪うのなら、浅はかな私だけを殺せ！」

押し寄せる悔恨の情が、押し掛かる自責の念が、張三の心を苛んでは追い詰める。

「父を返せ！ 母を返せっ！ 兄たちを、義姉を、幼き子らを、村のみんなを……返して

くれえ」

叫び、喚き、そうして最後には力なく項垂れて、彼は一人ぼっちで黄昏る。

「せめて、今だけは……」

やがて日が暮れて、夜も更け、死臭漂う墓の中で、張三は家族と共に眠りにつく。母の亡骸から伝わる冷たい温もりを感じながら、彼は消え入りそうな震える声音で小さく呟いた。

「おやすみなさい」

もはや涸れ果てたと思つていた一筋の涙滴が、青年の目元から静かにこぼれ落ちる。

* * *

翌日、青年は村内を隈なく回る。同胞たる村人を埋葬するために。

「この家の悪童には何度も手を焼いたものだ」

村の中を一步進む度に、村での思い出が脳裏を過る。

「お前のところは、赤子が産まれたばかりだったじゃないか。出産のときは居ても邪魔なだけでと産婆に家を追い出されて、お前は私のところでずっとオロオロしてたっけな」

抱き締めた赤子ごと剣で刺し貫かれて絶命している男を抱き起こし、張三は苦笑しながら語りかけた。

「……なあ、爺さん。いつも婆さんのことうるさいだの喧しいだの言つて嫌つてたくせに、やっぱり大切だったんじゃないか」

木に吊るされ絞殺されている年老いた男を見上げながら、彼は呆れたような声音で呟いた。

老翁は、首だけとなつてしまつた老婆の頭を大事そうに掻き抱き、死して尚、決して手放すことなく硬直していた。

「あのときは助けてやれなくてゴメンなあ……。いま、両親の下へ連れていつてやるからな」

あの夜、自分の目の前で両親の名を泣き叫びながら刺殺された幼い童を抱き上げる。痛かつたよな。苦しかつたよな。辛かつたよな

そして何より――

「父母の傍らで死ねなくて、寂しかつたよなあ」

青年は、村内を巡る。何度も何度も、何度でも廻りいく。

同胞を一人ぼつちにさせないために。誰一人として、忘れないために。最後の一人が見つかるまで、彼は何時間でも捜し続ける。

「これで、李家も全員揃つたな」

村の外れで、妹を守るように庇いながら絶命していた幼い兄妹の骸。それを大事に抱

えながら、彼らの両親の下へと歩みを進める。

ほとんどの村人は焼き殺されていたため、個人の特定がほぼ不可能だった。それでも、張三は焼け残った家の場所から家人を推測し、僅かに燃え残った体の部位や服飾から個人を割りだし、遺体に語りかけ、死者の声なき声を聴き、もはや執念とも、怨念とも思える情念だけで彼は同胞の屍をかき集めた。

穴を掘り、埋めて、穴を掘り、埋めて、穴を掘り、埋めて、そんな作業を丸一日かけて幾度となく繰り返し、ついには全ての村人を手厚く葬った。

家族の墓に別れを告げて、同胞たちの墓の前で懺悔し、最後に青年はかつての師の墓へとやってきた。

「……先生」

その声は震えていた。

もはや縫れるものは何もなく、寄る辺もない。これから先、彼は己の身一つでこの乱世を生きていかねばならないのだ。だからこそ、張三は師の墓前へと問いかける。

「先生は、こうなる事を知っていたのですか？」

ボロボロの掌で墓石を掴み、縫るように、憤るように、嘆くように、彼は安らかに眠る師を問い質す。

「『こうなると知っていて、私に』生きろ』と、そう言ったのですか?!」

『学べ、そして生きよ』

「生きることが、生きていくことがつ！　こんなにも辛いものだとは知りませんでした！　……知りたく、ありませんでした」

許されるのなら、青年はここで自裁し、家族と同胞が眠るこの地で朽ち果てたかった。しかし、いざ実行しようとする、かつて師と交わした遺言が如き言葉が脳裏をチラつき、結局死にきれなかったのだ。

「……先生。我が生涯唯一の師よ」

弱々しく震える背中。

血塗られた両手。

仄暗く濁った瞳。

「本当に、この未来さきに希望はあるのですか？」

どれだけ待っても、その疑問に答えが返ってくることは終ぞなかった。

とある国のありふれた日常

失意のままに村を出た張三は、この辺り一帯を治めている県城を目指した。

今さら官吏に訴え出たところで無駄であろうことは理解していても、それぐらいしかやるべきことが思いつかなかったのだ。

もし仮に張三が女性であり、氣を扱うことに長けていたなら一騎当千の武将として自ら恨みを晴らすことができたのかも知れない。若しくは鬼才天才と評されるような知略があれば、軍師として戦乱の世を太平へと導くために雄飛できたのだろう。

しかしながら、そのどちらの才も張三は持つていなかった。平々凡々とした体躯にそこそこの知識。だから彼に出来ることと言えば、それは役人に賊の被害を伝えて討伐してもらおうという、迂遠で不確かで他人任せな手段しか残されていなかった。

せめて家族や村の無念を晴らすため、仇を取るため、その一心で張三は鉛のように重い体を引き摺り、ふらつく足取りで街へと歩み続ける。略奪され、焼き払われた村にまともな財産や食料などあるわけもなく、道中、張三は道端の雑草を食み、木の皮を噛んで飢えをしのぎ、雨で喉の渇きを潤した。

そうして何日もかけて歩き続け、ようやく街を囲う壁が見えてきた頃になって違和感

に気付く。

「……なんだ？」

道中、すれ違う人が皆一様に張三を避け、彼を視界に入れる度に顔を顰めるのだ。

当初こそ余所者だからだろうと気にしないことにしていたのだが、さすがに変に思
い、彼は改めて自身の姿を確認してみた。合点がいった。

「これは流石に……このまま街まで辿り着いても門を通してはくれんだろうな」

全身が血と炭と泥塗れなのである。避けられるのも当然だった。

とは言え、目的地はもう目と鼻の先。こんなことなら途中の川で身を清めれば良かつ
たと後悔し始めたあたりで、街の側を流れる小川を見つける。

「丁度いい。服も洗濯してしまおう」

これ幸いとばかりに服を脱ぎ、冷たい川の水で体に付いた汚れを洗い流そうとする張
三。しかし、ふと少し離れた川辺に屯する老若男女が目にと留まった。

薄汚れ、痩せ細り、何をするでもなくただぼんやりと虚空へと視線を彷徨わせて黄昏
ている人々。一瞬、その姿に村を襲った難民の男たちを重ねて激高しかける張三であつ
たが、僅かに頭を振るとその思考を切り替える。確かに醸し出す雰囲気は似ているもの
の、よくよく観察してみればあの陰気な男たちに感じた得体の知れない不気味さはそこ
になく、あるのはただただ陰惨で、諦観めいた、どんよりと重苦しい陰鬱とした空気の

み。

そのとき、集団の中心にいた一人の女が徐に此方を向いて、しげしげと観察していた張三と目が合った。

その目を見て、張三は戦慄する。物言わず、身動き一つしない、青白い顔の幼子をひと抱きしめた女。その空虚でがらんとした女の瞳に、全身の肌が粟立つ。まるで引き込まれるような、すべてのものを引き摺りこむような、どこまでも深く暗澹とした眼睛。

「っ……っ！」

咄嗟に視線を振り切つて背を向けた張三。

あの瞳に魅入られれば、自分もまたここから動けなくなる。そう本能で理解した彼は、以降は頑なに集団から目を背けて身を清めることに集中する。

「……」

そして、そんな張三の後ろ姿を無機質な眼差して静かに見詰める女。

いつしか川辺に群れていた全員が、黙したまま張三をじつと凝視していた。

まるで、ナニかを見定めるように……。

* * *

身体の汚れを落とし、無事に沐浴を済ませた張三。途中、汚れの下から顔を出した傷口を見たことで、それまで麻痺していた痛覚が復活。痛みに気絶しかけ溺れそうになるというハプニングがあつたものの、張三はどうかこうにか街へと辿り着いた。

門番の兵はボロボロの出で立ちの張三を訝しんだものの、村が盗賊に襲われて無一文だと知ると面倒そうにあしらい、門を通してしまふ。どうやら、せびるだけの銭を持つていないと判断して興味が失せたらしい。釈然としないものを感じながら、張三は町を中心たる庁舎へと歩を進めた。

来庁した張三は係りの者に用件を伝える。聴取する故、しばし待てと言われ、待つ。……待つ。午前中に訪れた張三であつたが、既に時刻は昼を過ぎ、太陽は夕日へとその色を変えようかという時分。ようやく担当の男が張三の前に姿を現す。

「……また賊か」

張三の訴えに対応した官吏の第一声がそれだった。

疲れたように溜息をこぼすこの者の話によれば、ここ最近、張三の村と同じように難民を装った賊に襲われる被害が増えていゝらしい。鉦鹿郡だけで既に十数件以上。

徐々に他群でも同様の事件が散見されるにまで至っていると。

そして、狙われたのはいずれも兵が駐屯しておらず、自衛が難しいであろう郊外の寒村ばかり。つまりは張三たちの村は狙われるべくして狙われたということになる。

「そんな……。では、なぜ事前にお教えいただけなかったのですっ!? 予め警戒せよと知らせていただければ……」

「馬鹿か、貴様は。なぜ我らがそんなことをせねばならぬ」

前もって知っていれば賊による被害を防げた。身を乗り出し、そう言いたげな張三を蔑むように一瞥し、役人の男は面倒そうに言い捨てる。

「この県城や大きな街が襲われたならばいざ知らず、たかが寒村如きのためにそんな面倒なことができるか。この県だけでどれだけの集落があると思っておるのだ」

電話もインターネットもないこの時代。情報を伝達するとなれば人力に頼るしかなく、当然、伝令に使えるような馬や人材というのは貴重である。

だからこそ、役人側の人間からしてみればちっぽけな村々のためにそんな手間をかけるなんて正気の沙汰とは思えなかった。

「そ、それでは……賊の討伐は？」

「知らん。それは私の管轄ではないからな」

もしこれが見返りの期待できる相手であれば、もう少し役人の男の対応も違っていた

かもしれない。

しかし、既に滅んだ村の生き残りに出せる賄賂なぞであろうはずもなく、素気無くあしらわれる張三。結局、その後は滅んだ村の場所と襲ってきた賊の特徴などを聞かれ、それに答えたところで用済みとばかりに張三は庁舎から追い出されてしまう。

「……これで、終わり？」

既に日は落ち、寒風吹き荒れる空の下で茫然と立ち竦む張三。

憤慨、失望、悲哀、虚無——。やがて諦めたように項垂れると、彼は庁舎の建物を後にして歩き出す。

しかし、当然のことながら張三に行く当てなぞ無い。

金もないから亭に泊まることもできず、そこらの軒下で寒さを凌ごうかと思えば家主に追い払われ、薄汚い浮浪者のような格好の張三は道を歩いているだけで警邏の兵から小突かれ痛めつけられる始末。

読み書きができることを活かして住み込みの職にでも在りつけないかと考えるも、訪ねた工商の家々では胡散臭そうに見られ、迷惑そうな顔で追い帰され、ろくに話も聞いてもらえない。

「お願ひします！　せ、せめて本当に読み書きができるのか確認するだけでも——」

「……いい加減にしてくれ。最近、お前さんみたいな輩があちこち彷徨いて、こつちだつ

て困ってんだ。さっさとこの街から出てっくれ」

目を背けるように締め出され、地面へと力なくへたり込む張三。

これで何軒目か。何処に行っても厄介者扱い。取りつく島もなく、こちらをまともに見ようとしてもしない彼らの態度には怒りも湧く。しかし、それも仕方がないことと言えた。

彼らの言葉の端々に込められた忌避感。そこに気付ければ後は容易に想像がつく。

彼らとて同情心はあるのだ。けれど、彼らにだって守るべき生活がある。別にこの街の人間が特別冷酷なのではなく、自らが食べていくだけで精一杯なこのご時世、余所者の世話などしてやれる余地などある訳もない。もしそんな隙を見せれば、我も我もとあつという間に亡者の群れに集られ、骨の髄までしゃぶられる。

きつとそれで破滅した人間を間近で見ってきたのだろう。街の住民が張三へと向ける眼差しはひどく厳しく、冷たい、それでいて複雑な憐憫の情を感じるものだった。

「……これが、普通なのだろうな」

そして皮肉にも、張三にはそれらの機微を察するだけの理性が残っており、事情を推察できるだけの理解力も有していた。

ふと周囲を見渡せば、道行く住民が慌てて目を逸らす。その瞳の奥に畏怖の感情の潜ませながら。

ふと暗い路地裏に目を向ければ、先客らしいみすばらしい男たちが張三を威嚇する。野良猫が己の縄張りを主張するように。

表も裏も、誰も彼もが、張三がそこに居ることを許しはしない。

この街に自分の居場所はないのだろう。彼はそれをハッキリと認識する。

「結局、私は何もできないのか」

のそのそと重い足取りで、張三は歩き出した。

街に灯る家々の灯りが、彼の心根を暗く塗り潰す。街に響く家族の団欒の音が、彼の精神を摩耗させすり潰す。

虚しかった。遣る瀬無かった。そして何より、自分の無力さが憎らしかった。

まるでダレかから逃げるように、ナニかから追い立てられるように、彼は震える背を丸めて黙々と歩を進める。

そうして、固く閉ざされた城門の前へと辿り着いた張三。門の前で茫然自失と佇む張三を胡乱気に睨んだ門番の男は何かを察すると、僅かに門を開き、急ぎ立てるように彼を門の外へと押し出した。

街の外。寒空の下で途方に暮れ、ぼんやりと立ち竦む張三。

絶望に塗れたその瞳は、川辺で出会った女と同じものであった。

* * *

ふらふらと彷徨し、無気力に歩いてきた張三の足がふと止まる。

「……」

そこは街の近くを流れる小川であつた。

そして、彼の目の前にはあの川辺で見かけた浮浪者の群れ。

「ああ、そうか……」

何かを納得するように呟いて、張三はようやく理解する。

いや、違う。ずっと目を背けていた事実には、ようやく向き合つたのだ。

「皆、私と同じなのだな」

賊に故郷を滅ぼされたのか、あるいは重税に耐え兼ねて離散したか。

いずれにせよ、微かな望みに縋つて辿り着いたこの地で、現実に打ちのめされたのだろう。これ以上の行く当てなどなく、かといって自決するだけの気概もなく、日がな一日ぼんやりと無為に過ごす。

それは、緩やかな自殺であつた。

そんな彼ら彼女らを見渡し、張三は悟る。

これが、いまの漢帝国にとつての普通なのだ。日常なのだ。自分だけが特別不幸なのではなく、張三の身に降りかかった出来事もまた有り触れた悲劇の一幕でしかなくて――。

「……」

よろよろと足を踏み出していた張三は、やがて群れの中心ですとんと腰を下ろす。そして、そんな彼を難民たちも静かに受け入れた。

それは張三に向ける程の興味も気力も無かつた故か、それとも知らず芽生えた同族意識からか。暫しの間、辺りを不思議な静寂が包み込む。やがて、沈黙を打ち破るように張三がぼつりと呟いた。

「その童は、いくつになる?」

「……」

それは、彼の対面に座り込む女へと向けられた言葉。しかし、返事はない。

張三自身、何か答えを期待したつもりではなかつた。ただ、彼女が抱える幼子が気になつてしまい、知らず知らず疑問が口を衝いて出ていただけ。

物言わず、身動き一つしない、青白い顔の幼子をひしと抱きしめた女。

大事そうに、大切そうに、愛おしそうに、既に事切れた我が子を抱きしめ続ける母親。痩せ細り、枯れ木のような腕を僅かに軋ませて、彼女が小さく呟いた。

「——今年で五つに」

消え入りそうな声だった。震えるような声音だった。

「名は？」

「豊、と」

「……そうか。それは奇遇だ。実は私にも五歳になる甥がいてな。その子も名を豊と言うのだ。長兄の子なのだが、何でかこんな私にひどく懐いてくれる子でなあ」

ほつほつと、張三は懐かしむように語る。

「食べるのが好きな子でな。いつも口癖のようにお腹が空いたと言っておった」

朝起きては腹が減ったと言い、薄い粥の飯を食べ終えれば腹が減ったと言い、床に就けば腹が減ったと言って布団をかぶる。

「けれど、な。……笑うのだ。あの子は笑うのだよ。お腹が空いたと駄々をこねるでも、文句を言うでもなし、いつも楽しそうに『お腹空いた』と言って笑っておった」

朝起きれば朝ごはんだと笑って家族を起こして回り、粗末な飯を平らげれば美味しかったと嬉しそうに笑い、夜になれば明日は何が食えるかと夢見て笑う。

「あの子の笑顔に、私たち家族がどれだけ救われていたことか」

「……ええ」

「それなのに私は、私たちは……結局、あの子に腹いっぱい飯を食わせてやることすらで

きなかつた」

ふつふつと、張三は嘯みしめるように語る。

「その妹の良もりようそうだ。いつも兄である豊の後をヨチヨチと付いて歩いては楽しげに笑っていてな——」

張三は語る。ときに朗々と、ときに訥々と、愛らしい甥と姪のことを、いつも冗談を言つては笑つていた次兄のことを、子どもたちの気を引こうと必死な長兄のことを、落ち込む長兄を困つた顔で慰める義姉のことを、そんな家族を仲睦まじく見守る父母のことを——彼は、己の胸に刻み込むように語る。

「——ウチの豊は」

やがて張三のその想いは、さざ波のように難民の集団へと伝播していく。

女が語り終えれば、その後ろに座り込んでいた老人が口を開き、それが終わればまた次へ。決して大きな声量ではなかつたのに、掠れた小さな声は寒空の下に響き、不思議と彼らの耳を打つた。

「豊の孫は——」

「俺の息子だつて——」

「わたしの夫も——」

「オラの友が——」

大切な人を思い浮かべ、恋い焦がれ、誰しもが謔言のように語る。

親を、兄弟姉妹を、子を、孫を、伴侶を、友を、失ってしまった大事な人々を、その温もりを取り戻すように、彼らは語り続けた。

代わる代わる、途切れることなく語り継がれる死者の物語。

そこにはありふれた日常があった。いつもの光景があった。彼らにとつてのかけがえのない日々が、確かにあつたのだ。

「う……あ……つ」

「ああ……！」

「——ツ」

いつしか夜の帳に沈んだ川辺には、死者を偲ぶ回想ではなく、嗚咽の音色だけが静かに響いていた。

もはや涸れ果てたと思つていた涙腺から、じわりと涙が浮かぶ。精も根も尽き果てたと思つていた拳を、僅かに握り込む。

「……どう、して……っ……俺だけ、生き残ってしまったんだ」

「どうせ死ぬなら、家族と一緒に死にたかった」

「そうだ……あのまま故郷の村で死ねばよかったんだ……」

全てを奪われたその日から、彼らは何度も最後の安らぎを求めて夢想して、それでも

生きることを選択した。

「……でも」

「せめて、仇だけでも…討ちたかった」

「儂に奴らを屠るだけの力さえあれば、地の果てまでも追いかけて殺してやったというに……」

それは偏に、大事な人を奪った賊が憎くて仕方がなかったからだ。大切な故郷を追いかけて、詰めた役人どもが厭わしかったからだ。

「どうして…っ……、真面目に働いてた夫は殺されたのに、好き勝手暴れ回る賊は生かされてるのよ……」

「金を渡せば兵を出してくれると、そう言ったじゃないかっ!」

文字通り、彼らの命を賭した必死の訴えは通らなかつた。

担当が違うとあしらわれ、別な者を紹介するからと金をせびられ、紹介された者からまた公然と賄賂を要求される。彼らも薄々気づいてはいた。官吏どもに賊を討伐する気なんてさらさら無い、と。しかしそれでも、全てを失った彼らに他に縋るものなんてある訳もなく、なけなしの金をかき集め、それでも足りず、持っているものは全て売り払い、僅かな賃金のために命を捨てる覚悟で働き、髪を売り、身体を売り、そうして死に物狂いで集めた金を役人の男は薄く啗って懐に収めた。

数日待つても兵は動かない。役人の男は言う。いま上に掛け合っている。兵馬を整えているのだ。賊の潜伏場所を探っていてな。まだその時ではない。いずれ動く。そのうち出陣するだろう。後にしろ。今忙しい。黙れ。あの程度の額で兵を動かせる訳が無かるう。もつと持つて来い。無ければ来るな。うるさい帰れ。誰だ貴様らは。そんな話は知らん。迷惑だ。さっさとこの街から出ていけ。

そうして彼らの希望はあつさりと潰えた。

「……」

そんな彼らの怨嗟に満ちた声に、目を瞑り、静かに耳を傾けていた張三は思索する。

絶望に心折れ、膝を突き、もはや抜け殻と成り果てた彼らが、それでも今日まで生き長らえたのは何故か。きつとそれは——諦めきれなかつたのだろう。

無理だと理解していても、望みなんて皆無だと悟つていても、それでも憎くて悔しくて、死んでも死にきれなくて、だから彼らは城門が見えるこの川辺を死地と定めてじつと待ち続けたのだ。いつか賊を討伐するための兵馬が門を飛び出すことを願つて、自分たちから何もかも奪つた者達の首が並ぶのを信じて……。

ゆつくりと臉を上げた張三は、虚空を見上げる。

「……先生」

かつて自らが師事した老人へと思いを馳せて、彼は夜空に浮かぶ月へと言葉を投げ

る。

「我が師よ」

賊に滅ぼされた自らの故郷を想い、同じように壊滅した彼らの故郷を憂い、張三の暗く濁つた瞳に映り込んだ月が朱く染まる。

「私は、間違えました」

迂闊だったのだろう。愚蒙だったのだろう。油断すれば奪われるのが当然のこの時代、張三の村は、ここにいる彼らの村々は、滅ぶべくして滅んだのだろう。

「私は、愚かでした」

非情になるべきだった。慈悲などかけるべきではなかった。

「……それでも」

困っている人に優しくするのが間違っていて、苦しんでいる人に手を差し伸べるのは誤っていると言うのなら――。

「それでも、私は……村の皆の行いが……」正しく」なかつたとは、思いたくありません」

それは張三が師と仰ぐ老人との出会いを否定するということになる。

「我らが浅慮だった！ 愚鈍であつた！ だが、私たちは正しかった！」

かつて孔子が説き、儒教において最も重要な徳であるとされる——『仁』。
孟子をして『仁とは、人のことである。両者が合わさった状態を、正しい道と言う』と
伝え、人が人足り得る根源となる思想。

「正しくないのはオマエだ、天よっ！」

天へと響く張三の咆哮。

それは、『天の御使い』と呼ばれる少年が舞い降りる一年前の出来事であった。

張三、張子季、願叶といふ凡夫

月明かりの下で、一人の男が呟いた。

「……生きねばならぬ」

張三は語る。

「生きて、正さねばならぬ」

謔言のように紡がれた妄言のような言葉。

「正しくない世を、正しき世へと変えるために」

賊が蔓延るならば、その賊を打ち滅ぼし。

不正が罷り通るならば、その不正を断罪し。

天が民を見捨てるのならば、その天に代わり我らが民を守るべし。

「……無理だ」

誰かが呻くように呟いた。

「できっこない」

「俺らみたいな死にぞこないに何ができるってんだ」

「……所詮、私たちが何をやっても無駄なのよ」

彼らからこぼれ落ちるのは、否定と諦めの言葉の数々。

「……何故か」

張三は問う。

「儂らのようなただの貧民に、そんな力はありませんよ」

老いた男が自嘲するように口を開く。

「“力”とは？」

張三は再度問う。

「……」

しかし、張三の問いに答えられる者はいない。

「賊共を殲滅できる武力か？ 役人共に騙されないだけの知力か？」

ゆらゆらと幽鬼のように立ち上がった張三は、くるりと回り、困惑したように見上げ

る彼らを睥睨する。

「確かに我らは力も弱く、学もない」

張三は諭すように告げる。

「かつて我が師は言った。『学べ、そして生きよ』と……」

傷だらけの拳を握り締め、絶望に塗れた瞳を暗く澱ませて、張三は怨念のような執念だけで歯を食いしぼる。

「生きねばならぬのだ！ 我らが学んだ“過ち”を繰り返させないために、“絶望”を学んだ弱者である我らこそ生きて生きて生きて生き抜いて、後に続く者たちへと伝え導かねばならぬのだ！」

張三自身、どうしてこんなにも必死になつていいのか理解できてはいない。自分が生きてきたいが為か、それとも死にゆく彼らを見捨てられない為か。あるいは――。

「もはや、この国に未来はない。かつての殷が、周が、秦がそうであつたように、いずれ世に名だたる英雄英傑たちがこの漢という国は滅ぼし、新たな世を築くだろう」

「……なら、そいつらに任せとけばいいじゃないか」

「そうして何もかもを“英雄”に押し付けてきた結果が、この大陸の歴史であろう！」

それでは歴史が繰り返すだけだと、張三は訴える。

腐敗した国を憂い立ち上がった英傑たちが国を滅ぼし、新たに国を興してはやがて機能不全を起こして同じ過ちを繰り返す。その矢面に立つているのはいつだつてか弱き無事の民で、その度に自分たちのような存在が量産されるのだと、彼は遣り切れない想いを言葉に乗せる。

「ならどうしろってんだ……」

「所詮、俺たちや読み書きすらまともに出来ないんだぞ」

「知らぬのなら、学ばばよい。出来ぬのなら、出来ることを探せばよい」

張三の声を伝え届けるように、川辺に風が吹き抜ける。

それは冷たく厳しい、冬の風であった。

「どうして、わたしたちがそんなことを……」

「一騎当千の武將に、無力なる者の嘆きは理解できまい。神算鬼謀の軍師に、無知なる者の惨めさなど納得できまい」

「……だから、儂らがやるというのか」

別に張三は英雄たちの行いを否定したい訳ではない。

彼らの志は本物で、彼らが成し遂げた結果は尊いもので、それは歴史に語り継がれるに値する偉業だ。

しかし、だからこそズレが生じる。

どんなに高尚な理想を唱えようと、彼らの視線は常に空高く、その顔は天を仰ぎ見て、そこに弱き者の居場所は存在しない。

「我らが成し遂げる必要はない。我らがやり遂げる必要もない」

歴史に名を残すような英雄英傑と呼ばれる者たち。その英知を集めて築かれた城はきつと立派なのだろう。高い理想で構築された城郭は揺るぎ無く、城壁のようにそびえ

立つ大望の壁は天高く、そこに無知蒙昧たる民のための門は在ろうはずがない。

だから、どんなに賢明たる君主が民の声を聴こうと城の頂で耳を澄まそうとも、いつの時代も下々の声なき声は決して天へは届かない。当然だ、だってその城に民は居ないのだから。

「我らが成すは、ただ声を届けること」

張三といふ凡夫は、己が非力であることを自覚している。だから、自分がどんなに鍛錬しようとも天下無双の豪傑たちと肩を並べて武を競うことができないことを理解している。

張子季といふ凡夫は、己が非才であることを承知している。だから、自分がどれだけ思索しようとも鬼才天才と呼ばれる軍師たちと知を競うことができないことを納得している。

では、願加といふ凡夫は——？

「天にて鎮座する御方へと、弱き民の声を届けるために。そのために、どうか私に其方らの力を貸してほしい」

そう言つて真摯に頭を下げた願い乞う男の姿は、川辺で身を寄せ合い、この世を儚み憎悪の果てに死ぬはずであつた彼らの目にはどう映つたのだろうか。

張三のその言葉はきつと唐突で傲慢で、荒唐無稽も甚だしい独り善がりな、それこそ

突然訪れた不幸に気が触れてしまった哀れで愚か者の戯言でしかなくて、そのはずなのに、そこに居る誰も彼もが即座に拒絶の言葉を吐くことができずにいた。

広まる静寂を加速させるように、夜空に浮かんでいた月を雲が隠し、唯一の光源であつた月明かりを失つて暗闇に沈む川辺。

「……それなら」

やがて、一人の女がぽつりと呟いた。

それは、物言わず、身動き一つしない、青白い顔の幼子をひしと抱きしめた女であつた。

「もし、貴方の言うその務めをわたしたちが果たせれば……」

真つ暗な闇の中で、女が顔を上げる。

その双眸に、微かな、ほんの僅かな光を灯して。

「そうなれば……わたしの息子は、豊ほうの死は……無駄ではなくなりますか？」

せめて理由が欲しかった。

愛しい息子の短い生が、我が子の望まぬ死が、賊を楽しませるためでも、役人を肥え太らせるためでもなく、そこに確かな意味があつたのだという確固たる理由が欲しかった。

「わたしは……あんな奴らのために、自分のお腹を痛めてこの子を産んだんじゃない

……っ！

もはや骨と皮しか残っていないような細腕に力を込めて、女は息子の亡骸を強く、強く強く強く抱きしめる。

「いや……です。嫌だ。このまま、なんの意味もなく、何もできずに、息子の無念も晴らせぬまま死ぬのは、わたしは嫌です」

その悲痛な声を張三は静かに受け止め、然りと頷いた。

「……そうじゃ」

「そう、だ」

年老いた男が、小さく囁いた。

片目の潰れた男が、それに応えた。

傷つき、疲れ果て、何もかもを諦めて諦めきれなくて燻っていた者たちが、賛同するようによつくりと立ち上がる。

「簡単ではない。苦難に満ちて、苦悩に塗れて、苦汁を舐めて、これから我らが辿る道はきつと辛く厳しい道だろう」

最後の一人が立ち上がったことを確認し、張三は語る。

「……だが、大事な人を、大切なモノを、全てを失った苦しみに比べればどうということはない」

雲間から、再び月が顔を出した。

「我らは生きねばならぬ。どんなに惨めだろうと、蔑まされようと、生き足掻き、生き抜いて、新たな時代に太平の世を築くのだ」

月の灯りに照らされた彼らの双眸が、鈍く燃え、光を取り戻した。

* * *

そして張三たちは、川辺を後に歩き始めた。

これからどこに向かうのかと問う男に、張三は洛陽を目指すと答える。

庁舎で待ちぼうけを食らっているときに、張三は役人同士のある噂話を耳にしていた。

『あの曹孟徳が騎都尉に任じられるにあたり、兵を募っているらしい』

噂話がどこまで当てになるかなんて分からない。

噂では高潔な人物だと言う。公明正大で民を想い、文武を重んじ才に富んだ傑物であ

ると言う。

「そんな人間が本当に実在するのか？」

「誇張されてるだけでは？」

「どうせ嘘っぱちだ」

そんな風に不安をこぼす難民たちに、張三も確かにと首肯する。

「だがしかし、他と言つても北は幽州。白馬義従と誉高い公孫伯圭殿は異民族の討伐で朝廷になんぞ構つてはいられまい」

「では南の州は？」

「劉公山様は漢の皇族。我らの真意を見抜かれれば即座に首を撥ね飛ばされるだろう。そうすると、残りはここより東になるのだが……冀州を治めるは袁家だぞ？」

「……」

「ないな」

「だろう？」

何でだか高笑いをする豪華な金髪ドリルヘアが脳裏を過り、疲れたように首を左右に振る張三たち。そもそも、袁家がもつとまともに治めていれば自分たちはこんな目に合っていないのだ。

「幸い、鉅鹿郡から司隸までなら比較的距離も近い」

「……言うほど近いか？」

「まあ、涼州や益州よりはマシじゃろ」

未だ見ぬ曹操に不信感を募らせながらも、渋々といった体で張三の後に続く難民たち。

ただ、そんな彼らの余裕も数刻のうちに消え失せることとなる。洛陽までの道程は過酷を極めた。もとより金もなく、糧もなく、気力だけで歩み出した旅路なのだ。そうそうに限界は訪れた。

比較的まだ動ける者たちが率先して道中で獣を捕らえ、川で水を汲み、年老いた者達から聞き出した食せる草木をかき集めて飢えを耐え忍ぶ。道中の村や街では門前払いされることも珍しくなく、どうにか中へと入れても僅かな路銀や食料と引き換えに奴隷のように扱き使われたりもした。

荒れ果てた荒野を、険しい山河を、ふらふらと、ゆらゆらと、死霊の群れのようなりながらも張三達は幾月も歩き続ける。

「……儂は、もう……無理じゃ。こ……こ……置い……て……け。代わ……りに、どう……か仇を……つ……孫の、仇を……」

老いた男は、死の間際とは思えない力で張三の手を固く握りしめ、全てを託して逝った。

「あれは……」

見るからにひ弱そうな難民の群れである。奪えるものはないだろうが憂さ晴らしにはなるだろうと判断されたのかもしれない。下卑た笑みを浮かべた賊共に狙われたことも一度や二度ではない。

「俺たちが足止めする」

「お前さんらは、先に行きな」

片目が潰れた男が、片手を失った男が、他にも四肢に問題を抱えている者らが、賊に狙われる度に捨石となつて群れを離れていった。

杖代わりになっていた木の枝で殴りかかり、それが折れれば素手で、腕を斬られれば足で踏みつけ、それすら叶わなくなれば賊の身体に突っ込んで行つて肉を噛み千切る。その命尽きるまで、彼らはあらゆる手段で賊を殺しまわつた。狂つたように笑い、恨みを晴らすように憎悪の涙を流しながら、悪鬼のように賊を縊り殺し、最後にはやり切つたような顔で絶命していった。

「あと、少しだ……」

鉅鹿郡を発つたときには十数人いた群れも、一人減り二人減り、司隸との州境に辿り着く頃には半数近くにまでその数を減らしていた。

飢えに力尽き倒れた者。賊と相打ちになり散つていった者。その全員の願いを、想い

を、命を、張三は背負つて前へと突き進む。彼らの人生を無駄にしないために、彼らが語り継ぎたかった誰かの生涯を忘れぬために、生き残った者達は足を止めることなく歩き続ける。

「……着い、た？」

魑魅魍魎がひしめき合い、あらゆる富が、権力が、欲望が集まる場所——洛陽。

繰り返される政争によって荒れ果てた魔境に、張三は初めて足を踏み入れた。

曹操、曹孟徳、華琳といふ英雄

洛陽の街の一角。

大きな屋敷の一室で天を見上げ、睨むように目を細める少女がいた。陽光を受けて錦糸のように輝く金髪は両サイドでカールされており、鬮體をモチーフにした髪留めが苛立たしように僅かに震えている。

「……不甲斐ない」

その端正な顔をくしやりと擧め、少女は憤る。

それは視線の先に居るであろう天へと向けられた言葉か、あるいは現状に甘んじる自分自身へと向けられた怒りだろうか。

曹操という人間の半生は、屈辱に塗れたものだった。

宦官の最高位たる大長秋を務める曹騰そうとうを祖父にもつという恵まれた家柄に生まれ、幼少期より何不自由のない生活を送ってきた。

文武に秀で、何をさせても一流と評されるほどの才気にあふれ、本人も貪欲にその才

能を磨き、知識を深め、見識を広めていった。

自信があつた。己なら不可能はないと、確信があつた。

それは傲りでも自惚れでも慢心でもなくて、純然たる事実として、曹操は自らの才能に全幅の信頼を寄せていた。

自分のこの才能はきつと、崩壊しかけた漢帝国を救うために天が授けたものだと思ひ疑わなかつた。

若くして孝廉に推挙された。

洛陽北部尉に抜擢された。

相手が誰であろうと容赦はしなかつた。

五色棒を手に、禁令を犯す者がいればこれを断罪し、躊躇なく刑を執行する姿は洛陽の治安回復という目に見える形となつてすぐに現れた。

役人たちはそんな曹操を恐れた。

曹操は自分を冷酷だと非難する声には耳を貸さなかつた。

自分は間違つていないと、天はきちんと我が行いを見ていると、そう信じていた。暫くして、そんな曹操を嘲笑うように兗州は東郡の頓丘県令へと任命された。

任命を伝えられ、茫然とする曹操の後ろで宦官たちが愉悦の嗤みを浮かべていた。

榮転というカタチをとつてはいたが、それは誰がどう見ても左遷であつた。

失意のままに頓丘へと赴任した曹操に更なる追い打ちがかけられた。

宦官の讒言を受けた霊帝が宋皇后を廃したことで、宋一族と遠い縁戚関係にあった曹操も連座となつて県令を罷免された。

その後、古学に精通しているからと再び朝廷へ召し出され、議郎として任命された曹操だったが一度目の上奏はあつさりとなつて無視された。

二度目の上奏こそ受け入れられたものの、朝廷の腐敗は改善されず、そのすべては徒勞に終わった。

曹操といふ俊傑の中で、ナニかが音を立てて罅割れた。

曹孟徳といふ英傑の中で、ナニかが色を変えて渦巻いた。

華琳といふ稀代の英雄の中で、ナニかが声を荒げて咆哮した。

「それが天の意だと言ふのなら、もはや是非もない。我が天命は、私自身の手によつて掴み取るまで」

そうして少女は見切りをつけた。

朝廷を、帝を、漢という国を、彼女は——そのすべてを見限つた。

そんな曹操の内心の変容など露知らず、朝廷はまたしても彼女を呼び出す。近頃頻出するようになった賊の討伐を命じたのだ。

「謹んで拜命します」

膝を折り、静かに頭を下げた曹操は騎都尉を拜命する。

その双眸は、燃えていた。蒼天の瞳に大いなる野心と大望を宿し、少女はまるで宣誓するように天へと言い放った。

「すべては、この曹孟徳にお任せあれ！」

見る者を圧倒するような覇気を纏い、凜とした眼差しで宣言する霸王——華琳。

彼女が本当の意味で覇道を歩み始めた瞬間だった。

* * *

私室の戸が開かれ、窓辺で忌々しそうに空を睨みつけていた少女へと声が掛けられた。

「……華琳様。よろしいでしょうか？」

「あら、秋蘭」

静かに頭を下げるアクアマリンのような髪色の麗人。

彼女の片腕であり、同時に愛人でもある夏侯淵が少し困ったような表情で佇んでいた。

「どうかした？」

「いえ、少し……苛立っているように思えましたので」

そう言われ、「ああ」と得心いったように頷く曹操。

この夏侯淵はクールそうな外見とは裏腹に、常に最愛である主と姉を気遣い、どんな些細な変化も見逃さない。実によくできた部下である。

「……少し、ね。ここ最近のことを振り返っていたのよ」

「……そう、でしたか」

「ねえ、秋蘭」

少しだけ逡巡した曹操は、からかうように、試すように、僅かに口の端を持ち上げて口を開く。

「もう、この漢という国に未来は無いわ」

「っ……………」

「私が騎都尉に任じられたのがその証拠。この国はね、もはや自力で野盗の討伐すら満足にできる力が残っていないのよ」

そう言つて曹操は嘲笑するように薄く嗤うと、ゆつくりと夏侯淵に歩み寄る。

そして、冷たいアイスブルーの瞳で夏侯淵を見据え、彼女の前で腕を組むと曹操は感情の無い声で問い掛けた。

「……秋蘭。もし私がこの国を滅ぼすと言ったら、貴女はどうする?」

「我が身命、その全ては既に華琳様へと捧げております。華琳様が天を討てと仰せなら、この夏侯妙才、我が弓と矢に誓い、必ずや射抜いてみせましょう」

それはノータイムでの宣誓であつた。

儒教の教えが浸透しているこの時代。仕える主が朝廷を裏切り謀反を企てていると打ち明けたのに、そこに一切の動揺も狼狽も躊躇もなく夏侯淵は即座に曹操へ恭順の意を示してみせた。

「……まさか即答するとはね」

「おや? 華琳様は私の忠節をお疑いで?」

「そんなつもりはなかつただけど……。でも、そう。そうね。強いて言えば驚いた秋蘭の顔を愛でたかつたと言っておきましようか」

「ふふつ。それは残念。それならば驚いておけば良かったですな」

クスクスと澄ましたように笑う夏侯淵に、曹操も毒気が抜けたように苦笑する。

「……ふう。それで? 私に何か用があつたのでしょうか?」

「ああ、そうでした。実は、此度の募兵の件で華琳様に御裁可を仰ぎたく参上しました」

夏侯淵は場を仕切り直すように畏まると、恭しく曹操へと頭を下げる。

「その件は春蘭と秋蘭に一任していたはずだけど……。厄介な者でもやって来たかしら？」

「はっ。その…少々判断に困りました」

「いいわ。そういうことであれば、私自らに対応しましょう」

思案顔で訊ねた曹操に、夏侯淵は申し訳なきように応えた。

大抵のことなら器用にそつなくこなす夏侯淵。そんな彼女が困ったように言葉を詰まらせると言うことは、よつぼどの厄介事なのだろう。そう判断して曹操は鷹揚に首肯する。

このたび朝廷より騎都尉を拝命した曹操。しかし、彼女には両腕となる頼もしい武将はいても、その指示に従い戦場に立つて戦う精兵がいなかった。

なので一応官軍より兵が貸与されたのだが、そのほとんどが新兵同然であり、指揮官クラスの兵ですら曹操が要求する最低ラインを満たしていないという有様。ついでに言えば装備も何故か異様にボロい。ろくに手入れもされていなかったであろう剣は錆と刃こぼれだらけで戦う前からボロボロ。防具に至っては鎧も兜も無く、辛うじて極限まで使い古されたペラッペラの胸当てが支給されているのみと、いつそ野盗共の方が上等なものを装備してるんじゃないかと思えるほどだった。いくら懦弱な官軍と言えど、

ものには限度がある。あまりのお粗末さに頭を抱えた曹操が部隊長らしき兵に事情を問ひ質せば、その答えは今の漢帝国の現状を象徴するようなものだった。

相次ぐ政争に巻き込まれ、経験ある歴戦の将はその悉くが辺境に左遷されるか蟄居か、あるいは暗殺されたということ。

残つた者達は自衛のために派閥を作りはじめ、それが軍内部での派閥争いとなつて軍全体が疲弊。その混乱に乗じて武器や兵糧といった兵站を担当する役人たちの不正が横行し、横領・転売・水増し等が相次いだ。現場に配給される装備の品質はどんどんと劣化していき、終いには行軍に必要な糧食すら事欠く始末。

現状の改善を訴えても指揮官たちは自分の出世にしか興味がなく、才ある者や有能な者が現れれば一致団結して上から叩かれ潰された。仕方なく身を守るために派閥に属せば反対派閥の人間に狙われ、面倒事を避けようと派閥から距離をとれば不穏分子として全ての派閥から疎まれる。そんな状況で兵士たちのモチベーションが上がるはずもなく、日々の練兵など有つて無いようなものだったという。

そんな話を頭痛を堪えながら聞いていた曹操は、想定以上に機能不全に陥っている官軍の現状に眩暈を覚える。だが、兵士が語る話にはまだ続きがあった。

曰く、今回官軍から曹操へと兵を貸し与えることが決まつた際、曹操の噂を聞きつけ、現状に不満を抱く若手を中心となつてかなりの数が派遣部隊へと志願したらしかった。

しかし、その状況を危惧したのが軍の上役たち。自分たちの地位や利権を曹操に奪われると恐慌した彼らはかつて彼女に煮え湯を飲まされた官僚や宦官たちを味方につけ、方々に手を回した。部隊の編成や配給される兵站到横槍を入れ、事ある毎に難癖をつけ、最終的には洛陽防衛のためという大義名分の下に曹操へと派遣される兵はそのほとんどが練度もやる気も低い者らへと挿げ替えられたという。

そのあまりの愚かしさに、然しもの曹操も啞然として開いた口が塞がらなかつた。

そんな彼女へと追い打ちをかけるように、部隊長の男がどこか申し訳なさそうな顔で一本の竹簡を差し出す。訝しそうな表情で受け取った曹操が竹簡を広げてみれば、それは曹操へ宛てた彼らからのメッセージであつた。

意訳：

曹操たんへ

デュフフww 騎都尉就任おめ！ せつかく任せてやったんだからしつかり働くといいお！

あ、そうそう（洒落ではないw）。なんか勘違いしてイキつてた馬鹿共が騒いでたの
でこちらで対処しておいたお！ 感謝してほしいお！

だつてY o uなら賊討伐とか余裕だしよ？ あーんな大見得切つてたもんねエ
 ……「すべては、この曹孟徳にお任せあれ！（キリッ）」

なら官軍の精鋭なんて不要だよねw w w だから優秀な曹操さんのために相応しい兵を見繕つてあげたY o ! 泣いて喜んでくれてもいいんだからね！（チラツチラツ
 まあ、その代りと言つては何だけど、ついでにそいつらの練兵もシクよろD Eー
 ! あつ、そうそう（二回目）。曹操たん家つてお金持ちですよー？ じゃあ、装備も
 糧食も最低限用意しとけば無問題ですよー？ ほらー、官軍つて貧乏じゃないです
 かー。民から集めた貴重な血税を無駄遣いとかできないんですよー（笑）。だから足
 りない分は自分で調達する感じでオナシヤス！ ちなみに装備を壊したら弁償D e a
 t h ! 思う存分戦つてもらつて、どうぞ。

でもでも、たかが賊討伐に天下の官軍の兵を貸してあげたんだから、そのくらいして
 当然だもんね。仕方ないね。（ハナ ホジホジ

…え？ もしかして、できないとか言わないよね？ あの天才（笑）と名高い曹
 操たんが？ まっさかーw そんな事あるわけナツシングw w w まあ？ 優しい優
 しい僕ちんだし？ どうしてもできないなら、土下座しながら泣いて謝つて脇汗ペロペ
 ロさせてくれたら許してあげないこともないかもよ？ フヒヒw w w

じゃ、吉報を期待してるから精々ががんばつてねー!!

P. S.

大事な大事な天子様の兵なんで一人でも死なせたらテメエ処すから。そこんとこシクよろ！

曹操絶対許さないマン　より

「……………クロス」

「か、華琳様？」

「心ノ臓、止メテクレル…!!」

夏侯淵に先導されて現場へと向かっていた曹操は、ふと私兵を集めるに至った経緯を思い出して殺意の波動に目覚めかけていた。

敬愛する主から垂れ流される濃厚な殺気に普段は冷静沈着な夏侯淵も狼狽気味で冷や汗がタラリ。無意識のうちに腰元の餓狼爪へと手が伸びそうになっていた利き手を慌てて逆の手で押さえ、得物である大鎌・絶を構えて呪詛を紡ぐ曹操の姿に、焦ったように声を掛ける。

「華琳様ッ！」

「——！ふうー……。大丈夫、落ち着いたわ」

「その、ご気分が優れないようでしたら日を改めますが……」

「そうしたいのは山々だけれど、残念ながらそうも言つてられないわ。一日でも早く賊を討伐してあのボンクラどもを黙らせないといけないもの……」

そう言つて俯きながら「フフフ……」と不気味に笑う曹操。軽い恐怖である。

ちなみに曹操が構えていた方向には官軍の庁舎があるらしいけど、たぶんきつとおそらく偶然なので気にしてはいけない。

若干怯えながらも「そんな主も凛々しいなあ……」と思うことにして思考放棄した夏侯淵に促されて、曹操も再び歩き始める。

「……そういえば、その判断に悩む者というのはどういった輩なのかしら？」

「はっ。それが——」

ようやく平常モードに戻つてきた曹操。今さらながら相手の素性を何も聞いていないと思ひ至り、夏侯淵に訊ねてみた。

しかし、その問いに夏侯淵が答えるよりも前に、屋敷中に響き渡るような大喝でその疑問は解消されることとなる。

「何度言えばわかるのだ！ 貴様らのような乞食風情に曹孟徳様の兵が務まるものかっ

!! 出ていけっつっ!

夏侯淵と並び、曹操が最も信頼を寄せる武将。

彼女の従姉妹であり、夏侯淵が愛してやまない姉でもある夏侯惇の一喝に状況を察した曹操は疲れたように溜息を一つ。

「……このままじゃマズいわね。行くわよ、秋蘭」

「はっ!」

申し訳なさそうに頭を下げる夏侯淵を伴い、声の方へと足を向ける曹操。

冷静に、気品に満ちた足取りを心掛けながら、それでいてなるべく早足で現地へと向かいながら曹操は独りごちる。

「まさかこれも奴らの嫌がらせじゃないでしょうね?」

軽く頬を引き攣らせながら歩く彼女は、まだ知らない。

これが、自らの覇道に多大な影響を及ぼすことになる存在との邂逅になることを――